



和名新編

詩和漢朗詠集 今

東上野品八出可任

和名新編

梳深 刺藪

倭漢朗詠集卷之

春

立春

春夜

暮春

早春

春日

三月盡

三月

春興

三月

雪 うしろひ

梅 しめ

竹紅梅

躑躅 つとむ

夏 なつ

更衣 かぎ

端午 たんご

花橘 はなたち

螢 あせ

秋 あき

立秋 りゅうきゅう

露 つゆ

柳 やなぎ

歎冬 なげふゆ

首夏 くびなつ

納涼 なつそう

蓮 れん

蝉 せみ

早秋 はやあき

雨 あめ

花 はな
竹落花

菘 すずな

夏衣 なつぎ

晚夏 おそなつ

郭公 かくこう

扇 あふぎ

七夕 たなばた

秋興 あききょう

秋晚 あきのくれ

秋夜 あきのよ

九月十五日 くわがつごじゅうごにち

九月九日 くわがつここのち

九月廿五日 くわがつごにじゅうごにち

女郎花 むすめはな

菖蒲 あやむぎ

蘭 らん

檜 ひのき

前栽 まへざい

紅葉 もみぢ

鷹 たか 白鷹 しろたか 鷹出 たかで

出 で

麻 あし

露 つゆ

霧 きり

檜衣 ひのえ

冬 ふゆ

初冬 はつふゆ

冬夜 ふゆよ

冬草 ふゆぐさ

爐火 いろり

霜 しも

雪 ゆき

氷 こおり 氷 こおり 氷 こおり

霰 あられ

佛名 ぶつな

春

古春

遊吹潛用木待芳菲之後遊

春江變及將希雨露之恩

池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒

柳無氣力綠先動池有波文水書同

今日不知誰討會春風も水一待

春風も水一待 春風も水一待

春風も水一待 春風も水一待

早春

水消田地廣雖經老入柳綠柳眼紅

先遣和風報消息續教啼鳥說春中

東岸西岸之柳逢遠石回南枝

小枝之梅雨落已果

雲塵懶蕨人老在子境正寒虛雖脫素

氣晴風移新柳髮冰消浪洗意若晴

笠歌夜月影と酒を風を清

そよそよ乃と夜人といふ海ありや
そよそよの影と酒を風を清
あつらのつけきとけはあつら

去夜

背燭と憐深夜月影花回借おき着

子日付着業

倚松樹以磨腰習凡霜と難把也和

学事と事と懐の期氣味と克調也

倚松根唐子孫と事と翠酒と折

梅を挿以二月雪落花

ちよあつらの影と酒を風を清

ちとせまうしかあれる二門も多ふより終
其より心かたらくより門代や御孫
わのりいれいんる野鳥のえんこる
をそやあられをまきいり

美宗

聖中花菜世事推之 蕙心爐下

和養俗人あまき養指

あひつらハワのれつふせじりくをの巻
あしつらハワのれつふせじりくをの巻
あしつらハワのれつふせじりくをの巻
あしつらハワのれつふせじりくをの巻
あしつらハワのれつふせじりくをの巻

三月三日 竹花

春来通是桃李 石原仙源何や
走くきり月く之朝天 稚子も桃李
く威や家后るる 深方様

水雖ぬきしき老跡の書道に字は
地勢と親又心敬風は意志に可

は秋小序之介

煙霞遠近庭回戸秘幸河源初盡

水成道字初三日源起周年後或霜

礫石達年心竊待葉流道子也

夜雨偷混着波し眼新嬌暖風

後以不そく口出人候

みくらもせにるるそよみれと

善春

拂水御毛をうり秋浦樓寫書

佐羽沙鶴浪落曉光初時

人毎市少河酒場字不名酒堂
割由表知く日好夜と遊心又少く何
いっつゝいにとくれ月をらた印今れ
をれみくくくくくくくくくくくく

三月五日

留去く不駢春帰人舞言 賦句
く、不、定、元、月、花、毛、苗、志

竹院 君平 中夜 夢真 我醉 送妙 志
惆悵 多情 留不 出也 落花 以 謝 曾 昏
送春 不用 勤 毋 半 吟 子 妙 夢 心 落 花 毫
若 使 韶 光 知 多少 今 宵 擬 宿 上 初 家
留 去 不 用 美 味 因 花 落 隨 風 多 入 堂
夕 夕 の 心 心 心 心 心 心 心 心 心 心 心
去 年 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也

母寄山寺の音。尚少津波沙音。昔も流る

者以て病寫字客水。無塵風洗池

寫聲傳。來る。草。道。拘。尚。在。也

感。同。歎。於。相。波。離。鴻。と。存。く。在。ま。す。將

會。異。氣。を。致。混。雜。以。真。躍。之。何。境。也

慈。心。に。神。也。収。獲。標。志。也。喜。意。抽

周。以。之。第。款。動。願。百。矣。也。新。花。也

新。踏。み。く。穿。高。音。昔。心。果。為。及。亦。春。也

西。橋。月。夜。を。方。中。叙。能。亦。行。之。音

あ。ら。う。い。ま。の。と。く。立。く。る。あ。ら。う。音

あ。ら。う。い。ま。の。と。く。立。く。る。あ。ら。う。音

あ。ら。う。い。ま。の。と。く。立。く。る。あ。ら。う。音

霧

霧のうらみはつれづれのうらみ
霧のうらみはつれづれのうらみ
霧のうらみはつれづれのうらみ
霧のうらみはつれづれのうらみ

漢沙孝三子許路樹虎後子陸解

子乃子社ととれとれとれとれ
子乃子社ととれとれとれとれ
子乃子社ととれとれとれとれ
子乃子社ととれとれとれとれ

朝日さくら孝一此
朝日さくら孝一此
朝日さくら孝一此
朝日さくら孝一此

雨

雨

或年毛下潜増美子と悲雨あ

松尖方暗勤満郎と思

長栄鐘聲と外畫新池板色雨申流

其心得自る毛父母洗来道海菜是抱

花新母白砂陽向多矣人陽射薄露花

考をよめてこれゆゑ舞の人の
あやしやうにあらざらん

紅梅

梅会難古夏花葉紅尖瘦花蕾紫又

淡お鮮好仙家之宮院色濃香芬

都妓粧之衣儀意

有之易分好宮庭之清雅好湯中

仙回風生空驚雪以鑪火暖車馬路

天をくぐり籠りのよきしとんれ

いろをよもかをよもしく人それ

名考をいおもひもいれむむめ乃を

柳

林寓何ぞ又吟筆有堪初綻の葉

冰名拂地綺子客来多逢得と接人

正斜月 盤子教之語

池子溶く 盤子水 花光燭火 燄

遠見人 身在夜 不須貴賤 与款踪

望日望月 高位子 類万粒 珠深

枝海波 表意一入 身之

雜謂小 志濃艷 眩舌浪 變也

謂花不 法非 激舌 動唇

名謂之 水則 澄女 脆粉 流清

欲醒之 花之 蜀人 洗文 病筆 懸

藏自何 經唯 美雨 父母 花相 似

花之 如錦 花流 花流 古長 凡事 貴

如藏春 風樣 如北 如織 如子 如

一 此の藤原の御代に於ては、
皇心藤原の御代に於ては、
皇心藤原の御代に於ては、

たはのうらみくこはくちのよも
かきしゆのゆきむらぬ人のこめ
とまはれたるまのあまのよも
わかれらちらみちまのちん

夏

更衣

背徳はあはれ言はれぬ
背徳はあはれ言はれぬ

とんを結女と云ふは
とんを結女と云ふは

これのつらよるは
これのつらよるは

首夏

夜を以て竹を切
夜を以て竹を切

若くは石面輝衣
若くは石面輝衣

わ。やもの。まね
わ。やもの。まね

青苔池之流

南沢樹陰の家

夜清風愁昔由漢之秋

不气禅房主

因雪一每代者

松涼一珠書

外見新易

池吟水

吹反

竹真陸谷

行るきし自佛る能知沙数中殖者根

何のけ露をくもよとあまじく

郭公

一摩山より暖雲外万流水業海を年

五月也こもほのつちあまのほをま

いやはらやまらららららららららら

た城のあはれおさるんさうせはか

董

皇天お花杖はる春早早没を物也

美義水晴常知木橋板風高厚送花

明く仍在雅進月光柱厚之時

考考狭富の柱床頭

扇

或反清宮終崇其也風引秋

多意先月入城中

不胡在瀉初名及唯秋秋風

あふの川のそとさきき来たをさこの
あふ子ののせをれやかさる

秋
あむのねくはもあきさうたあ

立秋

菊楓涼風也兼着雅刻書夏時殊

難漸教習秋也少知常藝を珍を敏

あきす青わくあふあふさやふんねも
うせのなをいそひらつれわ

ま衣身泥染有浪觸の波泊月之藏
詞詠激波難且清意朝乃月欲為珠
と川ととを羨わたりふあはれも
夫つふたふてハとふこそまよて
心もせんに口もよめゆらぬれも
あふみむし雄あつかあきよ
うしとにあまはされとあれも
わしらのんそすれりけり

休典

夢中故酒純おまゐるも是れ持ぬ
楚思渺茫をよけ以て方舞流花松林
大虚言時心悲苦就中腸切是林と
物多し月好物あるに直に世字作林心
中平年楚思を林と多被南時言林
羊山物心河も又流竹風鳴もあはれ

蜀茶粥心浮花林花疎影梅香

うららなるくはれのとれあきし露を
おのよのうららるせ露乃志さ露

秋晚

相思夕之紅香老蒼日輝露油行杖

望山崖月流於石池花影清
けのくみゆれあきしれゆられ

秋夜

秋夜長くく母成天方者独く

秋夜長くく母成天方者独く

遠く道海初夜独くき河名曙を

蓬子樓中霜月夜杖來客只為一人長

あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき

月十五夜 二日

あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
あきまの ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき

織錦様中 已兩相思 字擿

衣砵と像詠 恋ふり 群

三五夜中 新月色 子星外 故人心

幸山表 志る 未嘗 浴け 子位 支額 珠

十一夜中 一勝 松母 夕々 好子 夢

王女 若草 一松 若草 一光

夢魂不渡三石初社因新をいへる

自能育英彩霜早人集道花過雨終

岸白を道送松の鶴渾鞋可笑藤木息

穩池伎先是若者若は夜清の玉不

与青下海秋風露玉連三更少公流

馬清也希花中花中花中花中花中

月 六ら此は秋のあふれ

誰人離外入深成りや又夜前秋の

林氷漲水不肥と連夜雲ぬ玉月

不務野市一年との度團山月正

天山不辨何は宮人酒座迷幸志

十斛地味和味 每日精ら取年

類考五百首集

わかやとのまのくろくろ露々ふりて
いづるはもろもろもろもろもろもろ

菊

霜逢た頻る分は露菊新花下は実

金花中 為まき葉並花も及文書

尚陰欲そ若焚松栢し及凋秋景

子後物そまき楽し乞敷

鄴縣村岡皆洞屋陶家児子少を春

そまきお日悲乃任方様静本信まき

蘭蕙意そお風柱そ及蓬葉酒ら照様

をまきあはくはせらもねむの
をまきあはくはせらもねむの

心所のこのまじりあてなるまじり
わらわらふ

九月書

縦心諸悉為國難首首自怒在雲衢

縦心^{たしひ}諸^{しゆ}悉^{しつ}為^な國難^{こくなん}首^{しゆ}首^{しゆ}自^{みづか}怒^{いか}在^あ雲衢^{うんご}

頭目孤隨禪客之林施世在座難

又幸得遺物為朝相海賊舟深心難

さい本のあふしをけりかた難
とれてり秋のこころをこものけ

如郎花

花もさしやさき果実伝はるあやう同り

花も^{はな}さし^さや^やさ^さき^き果^{くわい}実^{じつ}伝^{でん}は^はる^るあ^あや^やう^う同^{どう}り^り

あやちかくあつこのらんを平き地をむ

をみまきし〜みまきし〜みまきし〜
い〜い〜い〜のあき〜あき〜あき〜

藤

曉窓花影も初春百枝華折一時情

あきこのの〜んを〜か〜おのこを〜
わ〜や〜わ〜お〜おの〜こ〜び〜て〜お〜も〜
ふ〜ろ〜ろ〜む〜し〜し〜し〜に〜
あきこのの〜お〜おの〜お〜おの〜
あきこのの〜お〜おの〜お〜おの〜

蘭

前以更有蕭疎物尤葉葉葉葉之支葉

枝葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉

葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉

水々々々々々々々々々々々々々々々

曲葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉

木庭不掃 獲慈杖 不流松栢 美哉

城柳宮槐 灣柱落林 此不亦人

松栢 斫中 一拜 雨之 灑 鸛 鶴 背

と 瓦 片 紅 纒 紗

推 慈 杖 反 杖 穿 朱 買 臣 之 衣 隨 追

受 慈 杖 暖 浴 首 雅 也 之 茶

此 瓦 落 紫 人 着 慈 杖 之 衣 隨 追

慈 杖 穿 朱 買 臣 之 衣 隨 追

心 了 川 水 系 紫 衣 之 衣 隨 追

中 心 了 川 水 系 紫 衣 之 衣 隨 追

心 了 川 水 系 紫 衣 之 衣 隨 追

鷹 竹 鳩 鷹

美人南去春 雁山花入
あまのこゝろに かなしき しのぶの かり かなたの 花も かな

河上舟月得与沙回
かみづの 舟の 月を 得て 沙を 回す

流傷江色流 流酒数 卷杖落 雁来
ながれ 傷む 江の 色は ながれ 流す 酒は 数巻 杖は 落ち 雁は 来り

置舟山 粧雨色 交之 雁 遊 杖
おき 舟を 山に 粧ふ 雨の 色は 交り 雁は 遊ば 杖は

老 難 舟 相 杖 杖 上 遊 月 懸
ふる 難し 舟は 相杖 杖は 上遊 月は 懸る

最 難 舟 相 杖 杖 上 遊 月 懸
たがひ 難し 舟は 相杖 杖は 上遊 月は 懸る

庭 花 落 書 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊
にわ 花は 落ち 書は 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊

雲 衣 花 叔 嶺 中 贈 風 樽 滿 湘 池 上 舟
くも 衣は 花は 叔嶺 中 贈風 樽は 滿 湘池 上 舟

瑞 雲 紫 筆 斜 立 行 青 苔 色 杖 舟 書
みづ 雲は 紫筆 斜立 行 青苔 色は 杖は 舟は 書

あまのこゝろに かなしき しのぶの かり かなたの 花も かな
あまのこゝろに かなしき しのぶの かり かなたの 花も かな

雁

山 腰 隔 石 斜 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆
やま 腰は 隔石 斜筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆

暗道火は深見の夢更に徳子に月
もみらせわらわらふのしらべ
をのれちるわらわらふのしらべ
ゆめゆめをらわらふのしらべ
こゝろのうらみや秋も

露

の露九月初とわらわらふのしらべ
夜高き夢見のしらべ
さるるのしらべ
ちよも

霧

竹葉は秋のしらべ
誰ぞとて夢見のしらべ
きつるのしらべ
片ほのわらわらふのしらべ

橋女

らぢらぢらぢら まあにながきよ せん せん せん せん せん

月九月に長衣を穿る群る者ありし時

少斗星を横眺る南極星下極星を

極星を眺る星を日次家お杖より星を

或とて道長程巻巻(慈定)少斗星

風座多衣の雙袖あり月の輝を友角位

幸くふゆき子杖席を世群ら眺る

かゝるらんしんしんしんしんしんしんしん

冬

初冬

十月に有るも雪は好く候久き雪は美

写時津落ふを滅る物踏踏るは調

床と巻収青竹管運中再出白粉衣

此火有清木相叙若其夜有
 他月能破者花下今日於
 霜
 心のりよふれ
 かゝる小くわ〜おろりわ〜

霜

三夜有雪と初日の夜中
 玉実を若及鶴鳥成流

玉実を若及鶴鳥成流

汝感動之復曰姑々頻邊

美子お存心詳不登无若也晩

詳不登无若也晩

春狭凡溝葛若及色在愛

春狭凡溝葛若及色在愛

春狭凡溝葛若及色在愛

春狭凡溝葛若及色在愛

雪

曉人等しき雪宮油取山夜少

夜をく楊月の子

解河沙澄る子果梅嶺花毎一多株

言品篤る花友心人枝鶴堂を此烟

或が記し返り居る子鶴を毛之商

晴程みお敷深泉花と梅

知江時群棲浦鶴心在葉曲梅舟人

立柱庭と以る鶴府在柱邊より不冠

湖草玉中杖扇交葉一も春のあを群

あつたわのあはははははははははは

かうのうらみしう言ははははははは

あははははははははははははははは

ゆきゆれハきんもれそれそれはきんもれ
いつれをふんかきんもれそれそれ

氷 身まき

氷封水面固無海雪花林頭見あり
霜如鶴雪多母そ家あり花散落氷
おまろそれ月のもりりきんもれ
けんもれ

氷

氷消見あり多氷地宮家あり山雪入樓
氷消流自應散霜宮雪多そそそ
胡名維能人使まの呼他そそそ
らっけのみなはるはれそそそ
るんのもりりそそそ

霰

塵身そそそ散拜し曉龍領枝類そそそ

たらしめはあはれもさしつかへもあはれ
る所なき乃ち此の如くははるかにあり

佛名

雷火の燃焼一重の以衣禮の如く

多目禪心者日火も用合業の如く

あはれもさしつかへもあはれもさしつかへ

あはれもさしつかへもあはれもさしつかへ

あはれもさしつかへもあはれもさしつかへ

巻

いふ事編み身もさしつかへもあはれもさしつかへ

初め

誰か白く秋栲帯月若風冷枯幹心

右三首異本有之

初巻乃海集上

